3次元（接近-回避，問題-情動，行動-認知）モデルによるコーピング分類の妥当性の検討

広島大学 鈴木伸一

The validity of the three dimensional model to classify coping behavior

Shin-ichi Suzuki (Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-hiroshima 739-8524)

The purpose of this study was to validate the three dimensional model of classifying coping behavior. The three are: Encounter-Avoidance, Problem-Emotion, Behavior-Cognition Dimension. A set of questionnaires on coping behavior and psychological stress responses were administered, and 1 604 undergraduates and 1 296 adults completed them. Analyses of covariance structure were performed, and results indicated that the three dimensional model, with eight coping style, showed the highest goodness-of-fit statistics. Multiple regression analyses also indicated that Problem-Emotion and Behavior-Cognition dimensions were useful for predicting the coping effects on psychological stress responses. Therefore, the two dimensional model of Problem-Emotion and Behavior-Cognition, with four coping style, would be helpful for further investigation of coping behavior that would buffer psychological stress responses.

Key words: stress, coping, classification, structural equation modeling.

鈴木・神村（2001）は、従来のコーピング分類に関する研究を展望し、コーピングの分類においては、(a)直面する問題に接近しようとするコーピングであるか、あるいは回避しようとするコーピングであるかといったコーピングの方向性に関する次元（接近-回避次元，Obrist, 1981），(b)問題を解決することに焦点をあてたコーピングであるか、あるいは情緒的な混乱の鎮静に焦点をあてたコーピングであるかといった行動の焦点をどこに向けるかに関する次元（問題-情動次元，Folkman & Lazarus, 1980），(c)行動的なコーピングであるか、あるいは認知的なコーピングであるかといったコーピングの表出系に関する次元（行動-認知次元，Billings & Moos, 1981）などが提唱されていることを指摘している。しかしながら、従来の研究においてはコーピングの下位概念をどのような次元に基づいて分類することが妥当であるかに関しては一致した見解は得られていない（日下部・千田・陳・松本・筒井・尾崎・伊藤・中村・三浦・鈴木・坂野，2000）。

一方，Tobin, Holroyd, Reynolds, & Wigal (1989) や神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野（1995）は、コーピングの下位概念を一つの次元にそって理解するのではなく、下位概念の特徴を説明する水準が異なる複数の次元を同時に設定した分類を試みている。すなわち、彼らはコーピングの下位概念を“接近-回避次

元”，“問題-情動次元”，“行動-認知次元”の3次元から理解するとともに、コーピングの下位カテゴリーが3次元の組み合わせによって表現される8領域に分類できることを実証的に明らかにした（Figure 1）。Tobin et al. (1989) や神村他（1995）が行ったこの分類法は、これまで提唱されてきた分類に関する次元を包括的に理解できる点や、コーピングの下位概念の特徴を次元の組み合わせによって明確化できる点において有用であると考えられるが、3次元の組み合わせからコーピングを分類する方法が、従来の研究において行われてきた単次元による分類法に比べて妥当であるか、あるいは、その他の組み合わせによる分類（たとえば、3次元のうちのいずれか二つの次元の組み合わせで分類する）も可能なかなどについては実証的に検討されていない。

さらに、コーピングの評価・測定に関する従来の研究では、さまざまな対象者を想定した多くの尺度が開発されているが（日下部他，2000），コーピングをどのような次元に沿って分類することが妥当であるか、あるいはコーピング測定尺度をどのような下位尺度から構成することが妥当であるかに関する一致した見解が得られていない。このために、同じ領域の類似したサンプルを対象としているにもかかわらず非常に多くの尺度が存在しているのが現状である。また、各尺度における下位尺度数や項目内容および下位カテゴリーの

名称は研究者によって大きく異なっており、研究間でのデータ比較やコーピングの包括的理解を困難にしている（日下部他，2000；鈴木・神村，2001）。

これらの問題を解決するためには、コーピングの分類をどのような次元に沿って行うことが妥当であるかを詳細に検討するとともに、分類法の違いによってコーピングとストレス反応との関係性がどのように異なるかなどを検討し、各分類法の有用性を明らかにする必要があると考えられる。このような検討を行うことによって、各分類次元および分類法の妥当性や有用性を明確化することができれば、各研究者がコーピングの分類を行う際に、どのような次元を選択すればよいかを研究目的に沿って的確に判断することが可能となる。

そこで本研究では、接近-回避次元、問題-情動次元、および行動-認知次元の組み合わせによって表現される8領域のコーピング方略について項目収集が成された尺度について、各分類次元の妥当性を検討するとともに、分類法の違いによってコーピングとストレス反応との関係性がどのように異なるかを検討することを目的とする。具体的には、3次元モデルに基づく尺度項目群について、単一次元による分類、いずれか二つの次元の組み合わせによる分類、および3次元すべての組み合わせによる分類をそれぞれ想定した因子構造モデルを構築し、各モデルのデータへの適合度を検討するとともに、それぞれのモデルにおける構成概念である各コーピング方略と心理的ストレス反応との関連性を検討する。

方 法

対 象

首都圏在住の大学生1604名（男性782名、女性822名、平均年齢 19.95 ± 1.85 歳）、および成人1296名（男性1084名、女性212名、平均年齢 34.16 ± 9.38 歳）。

調査材料

コーピングの測定 神村他（1995）によって作成されたTri-axial Coping Scale（TAC-24）を使用した。この尺度は、従来の研究において提唱されてきた接近-回避次元、問題-情動次元、および行動-認知次元の組み合わせマトリックス（Figure 1）によって説明される8下位尺度、合計24項目（“情報収集”，“計画立案”，“カタルシス”，“放棄・諦め”，“責任転嫁”，“回避的思考”，“肯定的思考”，“気晴らし”，各3項目：累積寄与率は55.70%）から構成されている。また、この尺度の信頼性は、各下位尺度の内的整合性の観点から検討されており、いずれも高い値が示されている（ $\alpha = .84 - .65$ ，神村他，1995）。回答方法は、4段階評定（決してそうしない—必ずそうする）で行われ、各コーピングの採用頻度が高いと思われる方から3—0点が与えられた。

なお、TAC-24を検討材料として選択した理由は、TAC-24は、尺度作成段階において接近-回避次元、問題-情動次元、および行動-認知次元の8領域に対応

Figure 1. The classification of coping behavior in the three dimensional model.

Note. PL: Planning, WT: Wishful thinking, AB: Abandonment, AT: Avoidant thinking, IS: Information seeking, CA: Catharsis, RS: Responsibility shifting, DI: Distraction.

するコーピング方略に関する項目群が収集され、それらが独立した因子として抽出されるかが検討され、実証された尺度であり、3次元モデルに基づく因子構造モデルを検討するという本研究の目的に合致する尺度として妥当であると判断したからである。

心理的ストレス反応の測定 鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野（1997）によって作成された Stress Response Scale-18（SRS-18）を使用した。この尺度は、心理的ストレス反応を簡便に、かつ多面的に測定することが可能な尺度であり、“抑うつ・不安”、“不機嫌・怒り”、“無気力”の3下位尺度、合計18項目（各6項目：累積寄与率54.06%）から構成されている。この尺度の信頼性は、内的整合性、折半法、再検査法の観点から検討され、いずれも高い値が示されている（ $\alpha=.88-.82$ ，折半法： $r=.79-.71$ ，再検査法： $r=.91-.83$ ，鈴木他，1997）。また、妥当性に関しては、ストレス高低群および健常と臨床群の弁別的妥当性が示されるとともに（鈴木他，1997），各下位尺度項目の妥当性が項目反応理論によって示されている（鈴木・嶋田・坂野，1996）。回答方法は、4段階評定（全くちがう—その通りだ）で行われ、各心理的ストレス反応が高いと思われる方から3—0点が与えられた。

本研究で検討するモデルの構造

接近-回避次元（E-A次元と略記），問題-情動次元（P-E次元と略記），行動-認知次元（B-C次元と略記）に基づいて，単一次元による分類（1次元モデル），二つの次元の組み合わせによる分類（2次元モデル），3次元の組み合わせによる分類（3次元モデル）をそれぞれ想定した因子構造モデルを以下のように設定した。

1次元モデル TAC-24の項目をE-A次元，P-E次元，B-C次元のいずれか一つの次元によって分類するモデルである。モデルは，分類次元の対極となる二つの因子から構成される。

E-A次元モデル：“接近（En）型”と“回避（Av）型”の2因子構造である。

P-E次元モデル：“問題焦点（Pr）型”と“情動焦点（Em）型”の2因子構造である。

B-C次元モデル：“行動（Be）型”と“認知（Co）型”の2因子構造である。

2次元モデル TAC-24の項目をE-A次元，P-E次元，B-C次元のいずれか二つの組み合わせによって分類するモデルである。モデルは，両次元の組み合わせマトリックスによって説明される四つの因子から構成される。

E-A次元×P-E次元モデル：“接近・問題焦点（EnPr）型”，“接近・情動焦点（EnEm）型”，“回避・問題焦点（AvPr）型”，“回避・情動焦点

（AvEm）型”の4因子構造である。

P-E次元×B-C次元モデル：“接近・行動（EnBe）型”，“接近・認知（EnCo）型”，“回避・行動（AvBe）型”，“回避・認知（AvCo）型”の4因子構造である。

P-E次元×B-C次元モデル：“問題焦点・行動（PrBe）型”，“問題焦点・認知（PrCo）型”，“情動焦点・行動（EmBe）型”，“情動焦点・認知（EmCo）型”の4因子構造である。

3次元モデル TAC-24の項目をE-A次元，P-E次元，B-C次元の組み合わせによって分類するモデルである。モデルは，3次元の組み合わせマトリックスによって説明される8因子から構成される（TAC-24の原版モデル）。すなわち，“接近・問題焦点・行動（EnPrBe）型”：情報収集，“接近・問題焦点・認知（EnPrCo）型”：計画立案，“接近・情動焦点・行動（EnEmBe）型”：カタルシス，“接近・情動焦点・認知（EnEmCo）型”：肯定的思考，“回避・問題焦点・行動（AvPrBe）型”：責任転嫁，“回避・問題焦点・認知（AvPrCo）型”：放棄・諦め，“回避・情動焦点・行動（AvEmBe）型”：気晴らし，“回避・情動焦点・認知（AvEmCo）型”：回避的思考の8因子構造である。

モデルの評価 モデルの適合度の指標として， χ^2 値，GFI（Goodness of Fit Index），AGFI（Adjusted Goodness of Fit Index），RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）を用い，モデルの相対的評価の指標としてAIC（Akaike's Information Criterion）を用いた。

結 果

因子構造モデルの検討

あらかじめ設定された各因子構造モデルについて，共分散構造分析を大学生および成人それぞれについて行った。その結果，どちらの対象者においてもすべてのモデルが収束した。そこで各モデルの妥当性を検討するために，各モデルの適合度を算出した。Table 1は各モデルの χ^2 ，GFI，AGFI，AIC，および，RMSEAの値を示したものである。

まず大学生について見ると，Table 1に示されるように，最も高い適合度を示したのは3次元モデルであった。係数は，GFI=.90，AGFI=.86，RMSEA=.07であり，モデルの適合度を満足させる値が得られた。また，E-A次元×P-E次元の組み合わせによる2次元モデルは，適合度を満足させる十分な値ではないが，GFI=.77，AGFI=.72，RMSEA=.10と比較的良好な値を示していた。一方，B-C次元モデルとP-E次元モデルの適合度は，やや低い値であったが（B-C次元：GFI=.61，AGFI=.55，RMSEA=.14；P-E次

Table 1
Goodness of fit statistics of the factorial structure models

Dimension	Undergraduates					
	df	χ^2	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
1 dimensional model						
E-A	251	6289.14	.70	.64	.12	6387.14
P-E	251	7041.34	.65	.58	.13	7139.34
B-C	251	7866.24	.61	.55	.14	7964.24
2 dimensional model						
E-A×P-E	246	4304.06	.77	.72	.10	4412.06
E-A×B-C	246	5609.62	.72	.66	.11	5717.62
P-E×B-C	246	6122.00	.70	.62	.12	6230.00
3 dimensional model						
E-A×P-E×B-C	224	2027.57	.90	.86	.07	2179.57
Adults						
1 dimensional model						
E-A	251	4302.67	.73	.68	.11	4400.67
P-E	251	4690.14	.70	.64	.11	4788.14
B-C	251	5509.77	.65	.58	.12	5607.77
2 dimensional model						
E-A×P-E	246	2679.31	.82	.79	.08	2787.31
E-A×B-C	246	3415.93	.78	.73	.10	3523.93
P-E×B-C	246	3985.17	.73	.68	.10	4093.17
3 dimensional model						
E-A×P-E×B-C	224	1295.08	.92	.89	.06	1447.08

Note. E-A: Encounter-Avoidance dimension, P-E: Problem-Emotion dimension, B-C: Behavior-Cognition dimension.

元: GFI=.65, AGFI=.58, RMSEA=.13), その他には極端に適合度の低いモデルは認められなかった (GFI>.70, AGFI>.64, RMSEA<.12)。

成人についても, Table 1 に示されるようにほぼ同様の結果が得られた。すなわち, 3次元モデルは十分な適合度を示し (GFI=.92, AGFI=.89, RMSEA=.06), E-A 次元×P-E 次元モデルも比較的良好な値 (GFI=.82, AGFI=.79, RMSEA=.08) を示していた。一方, B-C 次元モデルの適合度が GFI=.65, AGFI=.58, RMSEA=.12 とやや低い値であったが, その他には極端に適合度の低いモデルは認められなかった (GFI>.70, AGFI>.64, RMSEA<.11)。

モデル別に見た各コーピング方略と心理的ストレス反応との関連

それぞれのモデルにおける構成概念である各コーピング方略と心理的ストレス反応との関係性を検討する

ために, 各コーピング方略の得点をそれぞれ説明変数とし, SRS-18 の各下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を大学生と成人それぞれについてモデル別に行った (Table 2)。まず重回帰係数について見ると, Table 2 に示されるように, 大学生と成人におけるいずれのモデルにおいても, 係数はすべての下位尺度得点において有意な値であった。そして, B-C 次元モデル, E-A 次元×B-C 次元モデル, および 3次元モデルが心理的ストレス反応に対して高い説明率を示していた。対象間の差異については, 大学生の方が, 成人に比べて説明率が全体的に高い傾向にあった。また, 反応間の差異については, 大学生においては, いずれのモデルも“抑うつ・不安”と“不機嫌・怒り”への説明率が“無気力”への説明率よりも高い傾向にあったが, 成人においては説明率の偏りは認められなかった。

次に, 標準偏回帰係数を見ると, 1次元モデルで

Table 2
Effects of coping behavior on psychological stress responses

Dimension	Coping type	Depression/Anxiety		Irritability/Anger		Helplessness	
		Undergraduates	Adults	Undergraduates	Adults	Undergraduates	Adults
1 dimensionnal model							
E-A	R^2	.15**	.07**	.15**	.07**	.08**	-.08**
	En type	.24**	.00 <i>ns</i>	.10**	.00 <i>ns</i>	.15**	.07*
	Av type	.28**	.26**	.36**	.25**	.23**	.28**
P-E	R^2	.10**	.09**	.11**	.09**	.04**	.10**
	Pr type	-.08**	-.25**	-.19**	-.24**	-.08**	-.30**
	Em type	.32**	.16**	.29**	.19**	.19**	.13**
B-C	R^2	.21**	.07**	.20**	.06**	.12**	.07**
	Be type	.45**	.20**	.39**	.19**	.33**	.17**
	Co type	-.13**	-.16**	-.23**	-.13**	-.12**	-.21**
2 dimensionnal model							
E-A × P-E	R^2	.17**	.11**	.15**	.11**	.10**	.13**
	En Pr type	.13**	-.10**	.08**	-.16**	.18**	-.13**
	En Em type	.22**	.17**	.08**	.23**	.06*	.13**
	Av Pr type	.27**	.27**	.30**	.21**	.29**	.29**
	Av Em type	.03 <i>ns</i>	.04 <i>ns</i>	.13**	.02 <i>ns</i>	.01 <i>ns</i>	.03 <i>ns</i>
	R^2	.22**	.08**	.20**	.07**	.13**	.09**
E-A × B-C	En Be type	.42**	.06 <i>ns</i>	.27**	.03 <i>ns</i>	.31**	.01 <i>ns</i>
	En Co type	-.16**	-.07*	-.19**	-.05*	-.15**	-.10**
	Av Be type	.15**	.20**	.28**	.21**	.13**	.20**
	Av Co type	.11**	.08*	.08**	.06*	.08**	.11**
	R^2	.18**	.11**	.18**	.12**	.10**	.12**
P-E × B-C	Pr Be type	-.03 <i>ns</i>	-.21**	-.11**	-.27**	-.02 <i>ns</i>	-.22**
	Pr Co type	-.08*	-.06*	-.11**	-.01 <i>ns</i>	-.09*	-.11*
	Em Be type	.47**	.24**	.44**	.25**	.35**	.18**
	Em Co type	-.11**	-.05 <i>ns</i>	-.12**	-.02 <i>ns</i>	-.15**	-.03 <i>ns</i>
3 dimensionnal model							
E-A × P-E × B-C	R^2	.26**	.14**	.23**	.14**	.17**	.14**
	En Pr Be type	.07*	-.17**	.03 <i>ns</i>	-.23**	.10**	-.16**
	En Pr Co type	.07*	.06*	.03 <i>ns</i>	.06*	.10**	.03 <i>ns</i>
	En Em Be type	.39**	.21**	.25**	.24**	.24**	.15**
	En Em Co type	-.17**	.00 <i>ns</i>	-.19**	.04 <i>ns</i>	-.20**	.01 <i>ns</i>
	Av Pr Be type	.12**	.13**	.17**	.12**	.10**	.16**
	Av Pr Co type	.09**	.16**	.10**	.11**	.14**	.18**
	Av Em Be type	.06*	.05 <i>ns</i>	.18**	.05 <i>ns</i>	.05*	.04 <i>ns</i>
	Av Em Co type	.04 <i>ns</i>	-.09**	.02 <i>ns</i>	-.08*	.00 <i>ns</i>	-.07*

** $p < .01$, * $p < .05$.

Note. E-A: Encounter-Avoidance dimension, P-E: Problem-Emotion dimension, B-C: Behavior-Cognition dimension, En: encounter type, Av: avoidant type, Pr: problem focus type, Em: emotion focus type, Be: behavioral type, Co: cognitive type.

は、大学生と成人ともにE-A次元モデルにおける各コーピング方略は、いずれも心理的ストレス反応に正の影響性を示していたが、P-E次元モデルとB-C次元モデルにおけるそれぞれ二つのコーピング方略は、いずれの反応においても一方が正の影響性（P-E次元モデルでは情動焦点型、B-C次元モデルでは行動型）、他方が負の影響性（P-E次元モデルでは問題焦点型、B-C次元モデルでは認知型）を示していた。2次元モデルでは、大学生と成人ともにE-A次元×P-E次元モデルとE-A次元×B-C次元モデルにおけるコーピング方略は、各心理的ストレス反応に対して正の影響性を示すコーピング方略が多かったが、P-E次元×B-C次元モデルでは、各心理的ストレス反応に対して負の影響性を示すコーピング方略が多かった。3次元モデルでは、大学生については“肯定的思考（接近・情動・認知型）”が心理的ストレス反応に負の強い影響性を示していたが、それ以外のコーピング方略は正の影響性を示していた。一方、成人については各心理的ストレス反応に負の強い影響性を示したのは“情報収集（接近・問題・行動型）”であった。また、“肯定的思考（接近・情動・認知型）”、“気晴らし（回避・情動・行動型）”には有意な影響性は認められなかった。

考 察

本研究の目的は、接近-回避次元、問題-情動次元、および行動-認知次元の組み合わせによって表現される8領域のコーピング方略について項目収集が成された尺度について、単一次元による分類、二つの次元の組み合わせによる分類、および3次元の組み合わせによる分類をそれぞれ想定した因子構造モデルを構築し、各モデルの適合度を共分散構造分析を用いて検討するとともに、各モデルの構成概念であるコーピング方略と心理的ストレス反応との関連性を検討することであった。

まず、大学生と成人それぞれにおいて、1次元モデル、2次元モデル、3次元モデルの検討を行った。その結果、どちらの年齢層においてもすべてのモデルが収束した。また、各モデルの適合度は、モデルの適合性を満足させる十分な値とは言えないが、極端に適合度の低いモデルは認められなかった。これらの結果は、これまで提唱されてきた接近-回避次元（Obrist, 1981）、問題-情動次元（Folkman & Lazarus, 1980）、行動-認知次元（Billings & Moos, 1981）がコーピングの分類次元として妥当であることを示していると考えられる。また、検討されたモデルの中で最も高い適合度を示したモデルは3次元モデルであり、適合度指数の値は、データとの適合性を満足させる十分な値であった。この結果は、データとの適合性という観点から各モデルの妥当性を考察すると、最も妥当なモデルは

3次元モデルであることを示しており、3次元の組み合わせからコーピングの下位概念を理解することによって、より妥当なコーピングの分類が可能になるというTobin et al. (1989) や神村他 (1995) の指摘と一致する結果が得られたと言えるであろう。さらに、各モデルの適合度は大学生と成人という異なる年齢層においてもほぼ同じ結果が示されていることを考慮すると、本研究で検討された各モデルは、年齢層の違いにおいても因子構造が安定していると考えられる。

次に、それぞれのモデルにおける構成概念である各コーピング方略と心理的ストレス反応との関係性を明らかにすることによって、分類法の違いによるコーピング方略のストレス反応に及ぼす影響性の差異を検討した。まず、単一次元による分類法の特徴について考察すると、問題-情動次元モデルと行動-認知次元モデルでは、大学生と成人のどちらの年齢層においても、モデルを構成する一方のコーピング方略が心理的ストレス反応に正の影響性を示し、他方が負の影響性を示すという結果が示された。しかし、接近-回避次元モデルのコーピング方略ではほとんどの反応において正の影響性しか認められなかった。これらの結果は、問題-情動次元、あるいは行動-認知次元によってコーピングを分類した際には、心理的ストレス反応に対して機能の異なるコーピング（正または負の影響性）を弁別することが可能であるが、接近-回避次元によって分類した場合には、コーピングの心理的ストレス反応に対する正・負の影響性を弁別することは困難であることを示している。これは、問題解決のコーピングは概ね適応的であるが、情動焦点型コーピングは心理的不適応状態と関連するという従来の指摘（Deborah & Gloria, 1998; Dunkel-Schetter, Feinstein, Taylor, & Falke, 1992; Vitaliano, Maiuro, Russo, & Becker, 1987）や、対処行動の組み合わせを考慮せずに、接近的対処過程と回避的対処過程のストレス反応に及ぼす影響性をそれぞれ独立して検討した際には、いずれの対処過程も心理的ストレス反応とは正の関係性が示されるという研究結果（鈴木・坂野, 1998）と一致している。

また、次元の組み合わせという観点から分類法の特徴を考察すると、大学生と成人のどちらの年齢層においても、接近-回避次元×問題-情動次元モデルおよび接近-回避次元×行動-認知次元モデルでは、心理的ストレス反応に正の影響性を示すコーピング方略が多く認められるが、問題-情動次元×行動-認知次元モデルでは、心理的ストレス反応に負の影響性を示すコーピング方略が多く認められた。これらの結果は、接近-回避次元と問題-情動次元の組み合わせ、あるいは接近-回避次元と行動-認知次元の組み合わせによってコーピングを分類した場合には、心理的ストレス反応を増大させるコーピング方略に関する情報を多く得るこ

とができ、問題-情動次元と行動-認知次元の組み合わせによってコーピングを分類した場合には、心理的ストレス反応を軽減させ得るコーピング方略に関する情報を多く得ることができることを示唆している。3次元モデルは、大学生と成人のどちらの年齢層においても、検討されたモデルの中で最も重回帰係数の値が高く、このモデルの心理的ストレス反応への説明率が高いことが示されたが、各コーピング方略の標準偏回帰係数を見ると、その値にはばらつきがあり、すべてのコーピング方略が心理的ストレス反応に強い影響性を示しているわけではなかった。また、成人においては有意な影響性を示さないコーピング方略が多く認められた。これらの結果は、3次元モデルはデータへの適合度が高く、三つの次元の組み合わせから各コーピング方略の特徴を具体的に理解できる点では優れているが、各コーピング方略の心理的ストレス反応への影響性という点から判断すると、影響性の強さはコーピング方略間や年齢層の違いによるばらつきが大きく、コーピングの心理的ストレス反応への影響性を系統的に理解するには混乱が生じる可能性があることを示唆している。

以上本研究では、接近-回避次元、問題-情動次元、および行動-認知次元の組み合わせによって表現される8領域のコーピング方略について項目収集が成された尺度について、コーピングの分類次元および分類法の特徴と妥当性が検討された。いずれのモデルも概ね妥当な分類法であることが確認されたが、各モデルのデータへの適合度およびコーピング方略と心理的ストレス反応との関係性を総合的に判断すると、特定のモデルのみがコーピングの分類法として優れているというのではなく、各モデルの特徴を考慮しながら研究者が研究目的にそって分類次元や分類法を選択する必要があることが示唆された。すなわち、(a)コーピングの心理的ストレスに対する正・負の影響性を明確に弁別できるような分類を行いたい場合には、問題-情動次元あるいは行動-認知次元を用いた1次元モデルが有用であると言えるであろう。また、(b)心理的ストレス反応を増大させる不適応的なコーピングを詳細に検討したい場合は、接近-回避次元×問題-情動次元モデルあるいは接近-回避次元×行動-認知次元モデルが有用であろう。一方、(c)心理的ストレス反応を軽減させ得るコーピングを検討したい場合は、問題-情動次元×行動-認知次元モデルが有用であろう。さらに、(d)コーピングの特徴を詳細にかつ具体的に分類することを目的とする場合には、3次元モデルが有用と言えるだろう。

しかし、本研究の結果は、3次元モデルに基づいて項目収集された単一の尺度において検討した限定的な知見に過ぎず、本研究の結果を一般化していくには、今後、複数の尺度から項目を広く収集し、同様の分析

を行う必要があると考えられる。また、本研究ではTobin et al. (1989) および神村他 (1995) の研究結果に基づいて三つの次元の独立性を仮定したモデルの検討を行ったが、1次元モデルの検討結果においては、行動-認知次元モデルの適合度が他の1次元モデルに比べて低いという結果が示された。さらに、神村他 (1995) の研究においては、3次元モデルに基づいて分類された8因子の因子得点を対象に2次因子分析を行うと、8因子は“問題解決・サポート希求”、“問題回避”、“肯定的解釈と気そらし”という三つの背後因子に分類され、行動-認知次元が確認できなくなるという結果が示されている。これらの点を考慮すると、行動-認知次元は、他の2次元の下位水準に存在する次元である可能性も残されている。このようなことから、今後、3次元の独立性についてはさらに検討が必要であると考えられる。

さらに、本研究の対象者は大学生と成人であったが、今後は、児童・生徒を対象とした研究や特定の臨床群を対象とした研究なども行うとともに、多母集団比較をねらいとした構造方程式モデリングを採用して検討を行うことも必要であると考えられる。このような検討を行うことによって、年齢層や領域による違いがより明確にされるであろう。

引用文献

- Billings, A. G., & Moos, R. H. 1981 The role of coping responses and social resources in attenuating the stress of life events. *Journal of Behavior Medicine*, 4, 139-157.
- Deborah, J. T., & Gloria, J. H. 1998 Adjustment to a Low-control situation: Reexamining the role of coping responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1078-1092.
- Dunkel-Schetter, C., Feinstein, L. G., Taylor, S. E., & Falke, R. L. 1992 Patterns of coping with cancer. *Health Psychology*, 11, 79-87.
- Folkman, S., & Lazarus, R. S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, 21, 219-239.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 筑波大学教育相談研究, 33, 41-47.
- (Kamimura, E., Ebihara, Y., Sato, K., Togasaki, Y., & Sakano, Y. 1995 A validation of three dimensional model of coping response and development of the Tri-axial Coping Scale (TAC-24). *Bulletin of Counseling and School Psychology*, 33, 41-47.)
- 日下部典子・千田若菜・陳 峻文・松本明生・筒井順子・尾崎健一・伊藤 拓・中村菜々子・三浦正江・鈴木伸一・坂野雄二 2000 コーピング尺度の開発とその信頼性の検討に関する展望 ヒューマンサイ

- エンスリサーチ, **9**, 313-328.
(Kusakabe, N., Chiba, W., Chen, S., Matsumoto, A., Tsutsui, J., Ozaki, K., Ito, T., Nakamura, N., Miura, M., Suzuki, S., & Sakano, Y. 2000 Review on development of coping scales and their validation. *Human Science Research*, **9**, 313-328.)
- Obst, P. A. 1981 *Cardiovascular psychophysiology*. New York: Plenum Press.
- 鈴木伸一・神村栄一 2001 コーピングとその測定に関する最近の研究動向 ストレス科学, **16**, 51-64.
(Suzuki, S., & Kamimura, E. 2001 Recent trends of research on coping and its measure. *Japanese Journal of Stress Science*, **16**, 51-64.)
- 鈴木伸一・坂野雄二 1998 ストレス対処過程における Effort, Distress 次元の検討 健康心理学研究, **11** (2), 15-24.
(Suzuki, S., & Sakano, Y. 1998 Effort and distress dimensions in stress coping processes. *Japanese Journal of Health Psychology*, **11**(2), 15-24.)
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 1997 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29.
(Suzuki, S., Shimada, H., Miura, M., Katayanagi, K., Umano, R., & Sakano, Y. 1997 Development of a new psychological stress response scale (SRS-18) and investigation of the reliability and the validity. *Japanese Journal of Behavior Medicine*, **4**, 22-29.)
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 1996 項目反応理論による心理的ストレス反応の表出水準に関する検討 ストレス科学研究, **11**, 1-10.
(Suzuki, S., Shimada, H., & Sakano, Y. 1996 The investigation of expression level of psychological stress responses according to the item response theory. *Sutoresu Kagaku Kenkyu*, **11**, 1-10.)
- Tobin, D. L., Holroyd, K. A., Reynolds, R. B., & Wigal, J. K. 1989 The hierarchical factor structure of the coping strategy inventory. *Cognitive Therapy and Research*, **13**, 343-361.
- Vitaliano, P. P., Maiuro, R. D., Russo, J., & Becker, J. 1987 Raw versus relative scores in assessment of coping strategies. *Journal of Behavioral Medicine*, **10**, 1-18.

——2002. 3. 28 受稿, 2003. 7. 5 受理——